
僕と彼女をつないだ物語

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女をつないだ物語

【Nコード】

N6264F

【作者名】

かさのきず

【あらすじ】

余命一ヶ月と申告された僕。そんな僕の元に、一通のメールが届いて……

僕の最後になるであろう夏も、終わりに近づいた時、僕のもとに一通のメールが届いた。

それは、僕が病室の暗い雰囲気になんて耐え切れず、屋上に出て風を受けていた時で、普段は電源を切っている携帯の電源を入れた時でもある。

「その日、僕は彼女と出会った」

僕はメールの本文を口に出して読んでみた。

他には何も書かれていないそれは、まるで書き始めの小説のようだった。いや、それそのものだと思う。

小説は好きだ。

小説の中でなら、心臓の悪い僕でもどんなことだってできるのだから。

だからと言っては変だけど、僕はそのメールにこう返信した。

「彼女は僕の隣に来て、いろいろなことを話してくれた」

次のメールが来たのは翌日、僕がまた屋上に出た時だった。

メールが入ってきているのを知ると、僕はたまらず興奮して、しばらくの間手が震えてしまっていた。

本文のほうを読んでみる。彼女が海に行った時のことを話してくれていた。

その中で僕は、彼女に冗談を言って笑わせている。

まるで、僕が彼女に本当に言っているような気持ちになって、僕は声にだしてその台詞を読んでみた。

「それじゃ、まるで黒人みたいだね」

その時、後ろで笑い声が聞こえた。

マズイ。これじゃ、まるで僕が変な人じゃないか。

まさか後ろに人がいたとは思ってなかったので、僕は慌てて振り返る。

「そんなに焼けてなんかいいわよ」

そして、

その日、僕は彼女と出会った。

「私ね。一ヶ月後に死ぬよ」

初めに、彼女はそう言った。

この一言は多分、自分に深く関わることで相手を傷つけることが嫌だから出た言葉。

そして、今まで僕が言ってきた言葉。

「僕は、あと一ヶ月は持たないんだ」

彼女はさすがに、少し驚いたようで、目を丸くした。

「私たち、一緒だね」

「なんか、運命みたいだなあ」

「運命なんだよ。きっと」

彼女はそう言うと、急にメールを打ち始めた。

何をしているのだろうと思ったけど、僕は彼女のそれが終わるまで待つ。

メールを送信して、彼女はこちらを横目で見ていた。

僕は話しかけようとした時、ポケットの中で携帯が鳴った。

彼女からだ。

「私たち、付き合ってみようか」

彼女はメールと同じ文章を口に出して伝えた。

僕は返信画面を呼び出すと、今までにない速さでメールを打つ。
「うん」

そのたった四文字のために。

それからというもの、僕は毎日屋上で彼女と会って、外に出れない僕は、メールの文章でのデートを重ねていた。

その日も、僕は彼女に会うために屋上までの階段を上っていた。しかし、途中で息切れを起こしてその場に座り込んでしまう。

心臓がすごい速さで脈動している。

これも病気の影響で、本来ならこうして病院内でも歩いてはならないのだが、僕が無理を言って特別に許可をもらっているのだ。

その日以降も、僕が一度に昇れる階段数は減っていき、この数が零になったとき、僕が死ぬような気がしてゾツとした。

そして、彼女と会っていくうちに、ついにその日が来てしまった。僕は階段の途中で倒れた。

不思議なくらい、恐怖はなく、ただ彼女に別れを告げたくて僕は携帯を取り出した。

「もう、僕は駄目みたいだ。

天国つてものがあつたらまた会おう」

動かない体を、無理矢理動かして仰向けになると、僕はそつと目を閉じようとした。

だけど、次の瞬間、携帯から聞き慣れたメロディーが流れてきて、僕の意識は引き戻される。

たぶん、もう返信をするだけの力はない。だけど、見ることなら可能はずだ。

手の中にある携帯を開くと、すぐに受信ボックスを開く。

メールにはこう書かれてあった。

「私の心は、あなたに捧げます」

その文章の意味がわからないまま、僕は目を閉じた。

次に目が覚めたとき、僕は屋上にいた。

「」

次に、母が自分を呼ぶ声。

体を動かそうとして、自分の体がまったく動かないことに気付いた。

でも、体勢から考えて、僕は今車椅子に座っているみたいだ。
「手術が成功したのよ。あとはリハビリ次第で普通の生活ができるようになるわよ」

母は喜びを隠せないようだった。

それに対して僕は、まったく別のことを考えていた。
彼女のことだ。

「僕、一体どのくらいの間寝てたの？」

「一ヶ月間、ずっと眠ってたわよ」

もう、心配したんだから。そう言う母の隣で僕は落胆していた。

一見、元気そうに見えていたが、彼女も何らかの病気を患っていたのだろう。

一ヶ月後に死ぬ。本当に彼女の言う通りなら、もう……。

「どうしたの？」

いつの間にか、僕は泣いていた。

母はひどく慌てていて、悪いとは思ってたけど、涙は止まらない。

「と、とにかく、病室に戻りましょう」

母に車椅子を押されて、僕は病室に戻った。

いつの間にか移動したのだろうか、僕は別の病室に戻された。

母に一人になりたいからと言うと、案外簡単に僕を残して出て行ってしまった。

まあ、個室じゃないから一人とは言いつらいけど。

そこで、僕は思いきり泣いた。

なぜ僕は生き残ってしまったのか。

こんな悲しいのならあの時死んでしまえばよかったんだ。

悲しさを紛らわすために、僕は携帯の電源を入れる。

彼女と僕のメールが、その中には入っている。

そして、僕は受信フォルダを開こうとして、そのことに気付いた。メールが、入っている。

間違いない、それは彼女からのものだった。

震える指で携帯を操作し、僕はそのメールを開く。

件名は、遺書。

「物語を続けよう。君と私の物語を。」

私がいなくなった後でも、君ならできると思うから。よろしくね」

僕はとっさに、携帯を床に叩きつけようとした。

もう、出来るわけがない。なぜ、彼女がいないのに、僕は書かなきゃいけないんだ。

「それが、あいつと君が繋がっている証だからだ」

いつの間にか、その人は僕の隣に立っていた。

「誰……ですか？」

「医者だよ」

彼は忌ま忌ましそうに、そう呟いた。

「そして、あいつの……父親だ。」

君がどうして生きているか、知っているか」

彼は、僕の返事も待たずに、一人、呟くように、または、懺悔するかのように語り始めた。

「君の心臓。それは、娘のものだった。」

ああ、心配しなくても、娘はなんの病気もなく、ちゃんと君の体に適応しているはずだ」

それだと、彼女は僕のために死んだのか？

「娘は、自殺することを、とうの昔に決めていたらしい。君に心臓を渡したのは、そのついでだろう。」

まったく、実の娘が傷ついていることにも気付かず、何が医者だっただよ」

彼はそう吐き捨てると、再び僕に向き合った。

「君と会っているとき、彼女は笑っていたか？」

何と言っているかわからず、僕はただ頷く。

すると彼は、ほんの少し救われた顔をした。

「なら、君は生きてくれ。」

そして、物語を紡いでいけ。それがあいつの望みであり、遺書だ。
頼んだぞ」

退院当日、僕はふたたび屋上に來ていた。

彼女との思い出の場所。

今、僕が感じている感情は、どう表現したらいいのだろう。
それが思い浮かばないことが悔しくて、また嬉しくもあった。
僕は携帯を開くと、メールを打つ。

これが、ここからだ。僕の始まりは。

「To be continued」 物語は、続いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264f/>

僕と彼女をつないだ物語

2010年10月8日15時34分発行